

吟社五月例会 席題「端午」

鯉幟打合ふ下の打球かな

句 帖

(曲水4-1)

日の下に御顔かがやく踏絵かな
帰る雁佐渡は見えゐて遠きかな

花の戸や足投げ出して明盲

厨水落つる江の蘆芽ぐみけり

吟社六月例会 席題「更衣、鮎」

格子出れば夜の人通り更衣

句 帖 三句

(曲水4-6)

何の種とも知らず蒔きたる秋日かな
人の死や月をかくして雲の峰

静岡長頸子

伊予道後

月の坂温泉を戻り来る禿かな

近詠二句

(曲水4-7)

麴や紅毛の児が銀の匙
夜長虫墨吐き死にし畳かな

■大正10年

涛衣、它可子、余石君歓迎句会 於流觴居 (曲水6-6)

若竹や畳にありし人くらし

伊豆・狩野川支社例会

(曲水6-9)

水や秋ひしと蟬なく草垂穂

新涼の土しみじみと夜明なる

■大正11年

一月元旦 東京青木幸太郎宛

(修善寺新井旅館の写真ハガキ)

修善寺新井にて 長頸子

伊豆の国湯の里より新年の

御慶申上げ 併せて御幸祈上候

御降や湯壺に出会ふ去年の顔

大正十一年一月元旦

雲ありて月の高さの余寒かな

(曲水7-3)

寒燈句会

月ながら天城焼け居る深夜かな

(3月1日)

春寒き影をりくや沼の鷺

近詠九句(水巴選)

(曲水7-3)

秋風がもて来る雪よ高嶺草

寒々と夕焼うつる野菊かな